

浅間山の歴史は、かなり広い範囲の浅間連峰（複合火山）全体を考えると、せいぜい数十万年で、日本列島の歴史から見れば、ほとんど生まれたばかりの山です。しかし、浅間山の周囲には、浅間山よりもずっと古い火山が点在しています。鷹繫山もその一つです。

鷹繫山（たかつなぎやま または ようけいざん）は、北軽井沢の東側に位置する独立峰です。私の山荘からもよく見えて、ちょうど「裏山」のような存在です。一応登山道はあるのですが、眺望やコース全体の魅力に乏しく、私は10回以上登りましたが、登山者も稀な淋しい山です。

誠に不遇な山ですが、実は火山としては浅間山の大先輩にあたります。鷹繫山は研究対象としてもあまり相手にされていない山で、扱った文献や論文も非常に少ないです。しかしよく調べると、新第三期後期の火山とわかりました。実年代で言えば、今から約300万年前。まだ日本列島が大陸と地続きで、ミエゾウ（三重象）が生息していた時代です。もちろん人類とも全く無縁の時代。鷹繫山は、そんな太古の昔に噴火活動をしていたわけです。山頂付近には安山岩の露頭も見られます。

浅間山の本体は現在でも噴火を繰り返しているのですが、風雨による浸食速度よりも、砕屑物や溶岩の堆積速度のほうが勝っています。つまり今でも山体が成長し続けているということです。しかし鷹繫山のほうは、活動をやめてから数百万年も経っているので、風雨の浸食が進み、火山であったことの痕跡を探すのが難しくなっています。麓から見ると、鷹繫山は山頂が二つに分かれて見えます。これはかつての火口壁の大部分が崩れ、「火口瀬」になった残骸です。実際に鷹繫山に登ると、山頂直下に急登があります。これは残存した「火口壁（山頂）」へよじ登っていると考えられます。今の季節は山頂付近から紅葉が進み、色のグラデーションが楽しめます。

（2024年10月下旬／北軽井沢・グランビュー17階展望台より）

